

訪 中 記

倉 橋 重 史

1.

昨年（1985年）4月26日から5月4日まで9日間、われわれ仏教大学社会学部社会学科の8名（秘書長、高屋教授、団員、浜岡教授、藤山、加藤、荒木、谷口各助教授、星講師、および倉橋）が中日友好協会の御招待により、中国を訪問し、学术交流をおこない、各地を見学する機会を得た。その時の模様は帰国後、6月27日の研究会で、私を含めて団員の数名の方々から報告された。しかし、当日はスライドを使用したため時間的な制限もあり、部分的なものにならざるを得なかった。これを補う意味もあり、また社会学研究所の編集会議の意向もあって、あらためて訪中の概要を記することにした。ここでは私が旅行中メモしていた日記を中心にして旅行記を綴ってみたい¹⁾。

なお、われわれは訪中に先立ち、中国の現代化の現状と、中国の社会学研究の動向を知るため、4月5日に研究会を開き、過去十数回中国を訪問された経験のある高屋教授から政治・経済を中心とした「中国社会の現状」の報告を開き、次いで私が、わが国の社会学研究者の中国との交流をとおして知りえた「中国社会学界の現状」を報告した²⁾。

〔注〕

1. この報告会で私は、次の観点についてのべた。
 - I. 中国社会科学院社会学研究所について
 - 1) 交流経過報告
 - 2) 社会学研究所の研究活動
 - II. 北京大学社会学系の研究活動について
 - 1) 交流経過報告
 - 2) 社会学系のスタッフとカリキュラム
 - III. 上海社会科学院について
 - 1) 交流経過報告

2) 上海社会科学院の研究機構

である。

2. この研究会での私の発表の概要は次のものである。「中国の社会学研究について」

1. 目的、現状把握のための略図づくり。
2. 方法、i) 中国社会の概要の理解（転換期の中国、現代化が進行中の中国） ii) 中国における社会学研究の中断と再開
3. 視角、i) 歴史的 ii) 地域的 iii) 専門別 iv) 全体的
4. 現代中国の社会学研究、i) 制度的研究 ii) 文献研究（中国社会学者の文献、日本の訪中社会学者の報告、旅行記、学术交流記） iii) 内容分析 iv) 比較、（中国と日本、中国の社会学研究中止前と再開後の比較）
5. 中国との学术交流で何を学ぶか、これからの課題

2.

4月26日（晴のち曇り）。午後2時頃大阪空港につく。すでに団員の方々は到着されていた。同乗されると思われる数名の中国の方々の手荷物に、日本製のテレビやワープロなどがかなり多く積まれており、この種の機器にたいする中国側の関心の高さを推測するとともに、ワープロにかんして同じ漢字文化圏のプラス面とマイナス面は何かについて社会的に考えてみるのも面白いと思った¹⁾。

中国民航機 CA922 便は4時半出発のところ少しおくれる。空はだんだん曇ってきた。8時（現地時間9時）に上海に着く。短い、近いというのが実感であった。待合室に出る。売店の商品やホールに掲げられた毛沢東の書をみて中国に来たんだなと思う。しばらく待って同じ機にのり、北京へ飛ぶ。十時半頃到着。中日友好協会副秘書長で、中国人民对外友好協会常務理

事の李福徳先生の出迎えをうける。特別室に招かれ、先生から流暢な日本語で歓迎の挨拶をうける。私が団員を代表して招待と歓迎のお礼をのべ、今回の訪中旅行の御力添に感謝する。今回のわれわれの旅行に通訳として上海まで同行して下さる周鑑氏、および世話役の孫氏が紹介される。車で人通りの少ない静かな道を走る。わが国の明るすぎる街灯とことなり、多少暗く感じられるが、そのほうがかえて落ち着いてよい。両側に街路樹が並ぶまっすぐな道である。街の向うにはリング林が繋がっているという話である。宿舎は蔣介石総統の元別邸であったという友好賓館である。旅装をとく、別棟の食堂で先方のお心づかいにより「おかゆ」の夜食をいただく。

〔注〕

1. 中国では50年代の後半、ローマ字による新書法が廃棄されたということをやんだことがあるが、海外の科学技術の導入によって漢字のみの表記はどのような問題を生むのであろうか。

3.

4月27日(晴)。朝6時起床、北京の朝はよく晴れていた。門を出て中国風の塀が並ぶ小路を短時間散歩する。広い大きい街とはちがった静けさがあり、身近な生活空間がある。友好賓館に戻ると昨夜は気づかなかった中国風の庭を発見する。石、しかも奇岩ともいふべき形の石で構成された庭である。植物や樹木はあるがどちらかというと石が主であるようだ。宿舎に行くときはこのような石を積み重ねて塀にしたトンネルのような通路をくぐりぬける。それは日本の石庭とは趣を異にする。その他の地域では多様な庭があることを読んだことがある。石による庭作りに、日本とは大きい相違があるというのが私の個人的印象である。

9時前に中国社会科学院に到着、建物は新しく、周囲はまだ整理中であつた。建物の中に20余

りの研究所が入っている。玄関に入って社会科学院科研大按分布示意图なるものをみると、世界経済政治研究所(3)、政治学研究所をはじめ、社会科学に含まれると思われるものが10あり、それ以外の人文科学のカテゴリーに分類されるところえられるもの、例えば、哲学(3)、文学(4)などの研究所が5つある。また研究所には世帯の大きいものも小さいものもあるらしく、さきにあげた文学は4、世界経済研究所や哲学などは3であるが社会学は1である。

二階の会議室で研究所の責任者王慶基先生、研究所長 雷鎮閻先生ほか 約20名の研究者と会う。まず会議の持ち方を話し、双方の紹介をし雷先生から社会学研究所の成立と今日までの経過説明および、研究活動、研究スタッフ等についての話しがある。

この要点をのべると、社会学の研究は1952年に中止され、79年に再開されたこと、現在、この研究所では所長のもとに宋家鼎氏と徐鳳姝氏の二人が主任であり、さらに李漢林氏と陳一筠氏が副主任であることの説明があつた。李博士は科学社会学の研究者でN. ルーマンに師事し、*Aus-differenzierung der Wissenschaftsbewertung in der Wissensproduktion* (Minerva-Publikation, 1984) を出版されている。

研究所の研究活動として、1) 83年に江蘇省(?)の小さい町を調査し、現代化における農村都市の適正規模人口等を明らかにしたこと、(なおこの調査は高い評価をうけたとのことである) 2) 家族と結婚の研究、3) 青少年問題、犯罪にかんする研究、4) 青少年の徳育にかんする研究、5) 青少年労働者の現状把握、があげられる。

研究所の規模についていえば、以前は研究者と職員が55人であつたが、84年に青少年研究所もでき、現在研究者は72人になっているとのこ

とであった。領域は6つに分かれ、社会理論の研究、都市・農村の生活様式、結婚・家庭、社会心理学、海外の社会学研究をおこない、「社会学研究」という雑誌を編集している。また72人の研究員はそれぞれの研究テーマをもっており、専攻分野は会議に出席された人々だけしか判明しないが（名簿に記載されていて欠席の方や、逆に記載もれで出席された方もあったようなので正確ではないが）名簿を中心にみると次のようになっている。a) 生活様式と結婚・家族研究（日本婦人の研究も含む）3人、b) 青少年問題2人、c) 犯罪の研究2人、d) 外国の社会学研究2人、e) 現代中国宗教問題、f) 人類学、民族学、g) 比較社会学、h) 社会学理論、i) 社会心理学、j) 大学生の心理学、k) 科学社会学、l) 都市社会学、m) 文化比較学研究が各々1人ずつとなっている。この外に編集にたずさわっている人が2人いる。

次いで私が「戦後日本の産業化」について報告した。その概要は、戦後日本の産業化を支えた条件は多いが、そのなかでも科学技術の発達に産業化の推進にもっとも力があったと考えられる。物的資源に乏しく、エネルギー小国であり、狭い国土に多数の人口を抱えた日本が生きるためには、知的資源としての科学技術の振興が必要不可欠であった。このような社会による科学技術の発達への要望、科学技術の発展を可能にする社会的諸条件の整備、逆に科学技術の発展により影響を受けた社会の相互関係を明らかにすることが必要になる。私の意図する科学・技術の社会学的研究のねらいはここにあるが、この立場から戦後日本の産業化をみると、まず人の問題があげられる。すなわち、産業化の担い手としての労働者、科学技術者の育成、教育の問題等がここに含まれる。次いで産業と直結する科学技術の振興の問題がある。この場

合、主として生産技術や運輸・交通技術、情報技術が重視されるが、それにとらず重要なのは管理技術である。それはさきにもべた産業化の推進に力ある、担い手の効率的な管理としての労務管理をはじめ生産管理、工場管理、QC、TQC、IE、OR、PERTなどの管理技術である。この管理技術が産業化に果たした役割を客観的に評価し、これからの産業化、情報化社会における意味を正確にとらえることが必要であることを指摘した¹⁾。

なお時間が許すならこれらの問題の基底にある日本の経営の問題を社会的にみる予定であったが、通訳を介しての報告であるため時間的にその部分を割愛せざるを得なかった。

私の報告にたいしてQCのこと、科学社会学、技術社会学にかんする質問が出て、これに応えたが、かみ合わない部分もあった。また私の報告はいわば光の部分に焦点をおいたため、公害等の影の部分については浜岡教授が補足され、産業化によって生じる社会問題、底辺労働者の生活等について話された。また私の言及しなかった産業化に随伴する諸現象については谷口助教授から都市への人口の集中にともなう住宅問題等の説明があった。

また質問のはじめに研究所主任の王先生から今日の日本の社会学で一番大きいテーマは何かという質問をうけた。私の産業化にかんする質疑応答が一応終った段階で、この問いにたいして私が「日本の社会学の現状」の要点だけをお話した。実はこれは午後訪問する北京大学で話す予定のものであった。

この要点だけを記すと、現在進行形の研究はどの分野でも現状を把握しそれを正しく、客観的に紹介することは困難であり、社会学においてもそれがあてはまる。しかしより客観的にとらえる一つの方法として科学社会学があると考

えられる。それは社会学の科学社会的把握、社会学の社会学といえるかもしれない。科学社会学にもいくつかのアプローチがあるが、その一つにアメリカでR. K. マートンらがおこなっている方法がある。彼らは科学を制度としてとらえ、それを研究者数、大学、研究機関、大学の講座、講義、学会、研究誌、専門雑誌等においてとらえようとしている。この方法を用いれば日本の社会学会員は1960年に約1,000名であったが、1975年に1,415名になり、1982年に1,804名、今日では約2,000名に達していると推測される。すなわち、約20年間で会員数は倍増したことになる。このような増加の原因として、外国とりわけアメリカの社会学研究を反映した、戦後の教育制度の変化、新制大学での社会学の講義数の増加、社会学科、社会学部の増設等が考えられる。1972年には社会学関係講義をもつ大学数が115あり、社会福祉学を含めると184校ある。大学院の数をみると同じ1972年に国立が16校、公立が4校、私立が29校であり、計49校となっている。なお民間の社会学関係の研究機関は67を数える。研究グループも1971年の時点で50あり、その内訳は理論(8)、農山村(7)、都市(7)、産業・労働(7)、地域社会(5)、教育・文化(4)、家族(3)、階層(2)、その他(7)となっている。社会学専攻者のみのグループが22、他の分野との共同研究であるが社会学者が多数を占めるグループ18となっており、所在地をみると関東地方が圧倒的に多く24グループ、関西地方、西部地方の各々10グループとなっている。しかしこの研究グループも小さいものやインフォーマルなものを加えると非常に多いと考えられる。

日本社会学会は1923年に創立され、「社会学雑誌」「季刊社会学」「年報社会学」「社会学研究」等の機関誌を発刊したが、戦後1950年に「社会学評論」を創刊し今日の至っている。他の雑

誌としては東北社会学研究会が1947年「社会学研究」を出し、社会学研究会が1952年「ソシオロジ」、現代社会学会議が1974年「現代社会学」を出している。その各々の雑誌の外に各大学、研究機関等は研究誌や所報を刊行しており、これらに投稿され掲載される論文、研究ノート等の数は年々多くなっている。このような発表論文からみた社会学研究者の研究分野を1965年、70年、75年、79年、80年、81年、82年、83年(補遺を除いた分)を各年ごとに示した表を配布し、どの分野の論文が多いか、また年度による増減を知っていただくことにした²⁾。

以上の報告にたいしてパーソンズの構造—機能主義と、その批判理論の日本での浸透度をはじめ、最初の私の報告にもどって管理技術にかんする質問があり、中国での社会学の教師不足や教科書不足等の現状について説明がなされた。

最後に高屋教授から今後、仏教大学の社会学科および社会学研究所と中国社会科学院の社会学研究所との文献の交流、さらに出来うれば人的交流をすすめたい旨の提案があり、前者について具体化がのぞまれることを確認し、先方の先生方の著書・論文と、当方から持参した団員の著書・論文、研究所報告を交換し、11時すぎに会議を終えた。のち中国社会科学院の玄関で記念撮影をし、相互の再会を期して別れた。

宿舎に帰る途中、両替をするために北京飯店に立寄り、昼食をすませ、2時半に北京大学を訪ねる。

〔注〕

- 1) この点にかんして、本報告を土台として、とくに管理技術に焦点をあてたものに「産業化と管理技術」がある。(仏教大学「社会学論叢」第19号)
- 2) この部分は星講師と私との共同作業による。だが星講師の用意された引用分析に関する調査について、言及する時間の余裕がなかったことは残念である。

4.

北京大学は市の北西部に位置し、宿舎から割合近いところにある。大学の創設は1898年というから東京帝国大学より1年おくれである。キャンパスは150ヘクタールで、京都御苑が65ヘクタールであるから約2.3倍強の広さである。赤門をくぐり、内に入ると池や塔や大樹ありで公園にきたようである。学生の姿も余りみられない。そのなかに大学の建物が点在している。学部としては自然科学、人文・社会科学、言語・文学の3つがあり、学生数は自然科学部が5,335人、人文・社会科学部が2,963人、言語・文学部、2,629人、計8,926人となっている。この外に特別プログラムの学生として705人が在学している。大学院の学生は各々1,075人(内博士課程69人) 651人(23人)、78人(2人)の計1,804人である。これは大学からもらった「北京大学」のパンフレットに掲げている数字である(1984年現在)。

ファカルティ・メンバーは自然科学部1,538人、人文・社会科学部793人、言語・文学部388人、他152人である。そのうち教授が164人、准教授(Associate Professor) 612人、講師1,268人、助手416人、他409人、計2,869人である。人文・社会学部は中国語・中国文学(教授11人、准教授39人、講師40人)、歴史学(以上と同様の順序で8人、25人、21人)、考古学(2人、7人、3人)、哲学(6人、23人、25人)、経済学(12人、25人、28人)、法学(7人、23人、33人)、国際政治学(11人、25人、7人)、図書館学(10人、10人、4人)、社会学(1人、2人、2人)、西欧言語・文学(8人、13人、30人)、英語・英文法(12人、13人、27人)、東洋言語・文学(4人、32人、42人)、ロシア語・文学(4人、20人、32人)、マルクス・レーニンの教育と研究(副教授15、助手

12) となっている。

以上で判明するように社会学は他の学科とくらべてスタッフが一番少ない。これは約28年間社会学の研究が中止させられていた為であり、この空白期間が、社会学の教師の年齢のかたよりや世代別構成に反映している。かつて社会学を学んだ教師は60歳近くになっており、若手の教師との世代の幅が大きい。高齢の教授が社会学の学生の養成、教育に当らなければならず、午前中の社会科学院で一寸話に出た教師の不足の実態が北京大学にもあらわれているのではないかと思う。しかし北京大学の案内の数字とは少しことなり、実際(1984年4月)の社会学科のメンバーは教授2人、准教授2人、講師4人、助手6人であることがわかった。つまり常勤の教師として主任である袁方先生と雷潔瓊先生とお二人が教授、韓明漢先生と江美球先生のお二人が准教授であり、副主任である華青先生他3人が講師である。また、非常勤の教授として費孝通先生と陳万照先生がおられ、准教授として全未天先生、講師として盧淑華先生がおられることになる。

社会学科は1981年、最初の研究生(大学院生)5人をうけ入れ、今日では大学院生28人で、83年度は本科生が31名、84年度は30名の計61名が在学している。学部のコースとしては必修の共通科目として、中共学史(4単位)、哲学(6)、政治経済学(6)、体育(4)、外国語(16)、計(36単位)があり、卒業必修課程として社会学概論(6)、マルクス主義社会学(4)、人類学(4)、社会心理学(2)、人口問題(6)、中国社会思想史(2)、外国社会学論(2)、農村・都市社会学(4)、法学概論・政治学概論・論理学(6)、計(83単位)、3科目中1科目を選択する科目として高等数学(6)、統計学(4)等11科目がある。別の選択科目として労働問題(4)、生産制度(2)等13課

目があり、単位に算えられない講座や時事政策の学習、生産労働、軍事訓練が課せられている。以上をみるとどのような課目に重点がおかれているかがわかり、また社会主義国中国における社会学のアウトラインを知ることができる。

北京大学の先生から仏教大学と社会学部社会学学科の実情にかんして質問があり、加藤助教授から沿革および社会学部設立の経緯、現状の学生数、教員数、学科目等にかんする説明がなされ、浜岡教授から今日の段階での中国の社会学とマルクス主義との関連性について質問がある。これにたいしてマルクス主義は科学の一つであり、マルクスの政治・経済学と社会学と関連性がある箇所を学生に読ませているという答えがかえってきた。

次いで私から「日本の社会学の現状」について報告する。内容は午前中に社会科学院で行ったものと同じであるが、多少変更した。これに対する質問として科学社会学の方法、パーソンズ理論の日本のうけとめ方、社会工学等についてであった。また加藤助教授の説明にたいして仏教大学における信仰と社会学との関係についてカリキュラムを中心にした質問がなされ、階級理論と中流意識について浜岡教授に対する質問があり、両先生からそれぞれ説明が加えられた。最後に星講師から人口問題にかんして一人っ子政策と伝統的な家族についての考え方のギャップがないかどうかという質問が出て、袁先生が人口問題の解決のためにも、人民の生活を高めるためにも、一人っ子政策は必要であるが、地方では男子を好む伝統的な考え方との矛盾が生じたり、人口の老年化との関係が問題となるなどの説明があった。最後に双方の著書・論文を交換し、今後の学术交流と文献の交流を提案し、4時半すぎに大学を去った。北京市内は人々が活発に動き、高層建築の造築中であつた。

夜は中日友好協会による歓迎会に招待された。東来順風店で羊のしゃぶしゃぶをいただく。中国人民対外友好協会副会長であり、中日友好協会副会長、中国作家協会理事である林林先生が出席された。先生は早稲田大学文学部の御出身であり、先生の学生時代のことから始まり今日の中国の現代化、日本の俳句など、話題が豊富でたのしい夜をすごさしていただいた。九時半頃宿舎にもどり、今日の学术交流の成果について話し、反省点を話し、午前1時頃就床する。

1) この点については本号所収の「北京大学社会学系との学术交流」37～39頁を参照されたい。

6.

4月28日(晴)。今日から上海での5月3日まで私が報告するオブレーションがないと思うと勝手なもので、何だか今朝はとくによく晴れているように感じ、すがすがしい気分になる。7時すぎ朝食をすませる。老舎の研究のため二ヶ月程この宿舎に滞在されている、竜谷大学の柴垣芳太郎先生から万里の長城に行くなら、途中居庸関に立寄ったらというアドバイスをうける。8時半に車3台に分乗して宿舎を出発。まず天壇公園に向う。丹青の瓦でふき、大理石の上に立つ祈年殿は美しい。印鑑を注文し、買物をし、その後、北京の北西約40キロメートルのところにある明の十三陵へと車を走らせる。

市の郊外に出ると荷物をもって歩く人、自転車にのる人、転転機にリヤカーをつけて、野菜や建材を運ぶ人、サイドカーつきのオートバイ、荷物を満載したトラック、バス、乗用車が道にあふれている。われわれの車も混雑をさけて左の方を走っている、対向車がくると右の方に戻るといったあんばいで、かなりハラハラすることもあった。しかしこれは人間だけでなく、物の流れが活発であることを示すもので、現代化の

一つである産業化がスピーディーにすすんでいることの証左であろう。かつてフィリピンに行ったとき、マニラ市内で多くの若者が白昼から道端に佇んでいる光景やジプニーという小型乗合バスで人々が移動する様子は多くみたが、トラック等の物資の運搬を目撃することは少なかった。これにたいして中国は市街でも郊外でも人も物も移動しており、社会が活発に動いているという印象をうけた。

大牌楼をぬけて明の十三陵の陵域に入ると、陵墓を守る石獣の大きさにおどろかされる。また定陵の地下宮殿の巨大さや定陵博物館に陳列された豪華絢爛たる副葬品をみる。それは数多くの人間を支配した現実の権力と、死後の世界への執着が生み出したものであろう。このとき M. ウェーバーが団体を政治団体と教政団体 (Hierokratische Verband) に分けたことを考えていた。政治と宗教を非日常性という共通項でくくった意味がわかるような気がする。

万里の長城に向う途中、居庸関に立寄る。この内壁に諸仏諸尊の浮き彫りがみられる。帰国後、知ったことであるが、文字は仏頂尊勝陀羅尼經と如来心陀羅尼經の陀羅尼が梵字 (ランツァ文字) チベット文字、ウイグル文字、パクパ文字、西夏文字および漢字の 6 文字によって刻まれているとのことであった。刻まれた時代は 1343 年で、元朝の時代であるといわれている。

ここでの印象を二三のべておきたい。居庸関とは関所であり、したがって地理的、空間的に周辺部に位置すると共に、政治的、経済的、文化的に重要な点であるという二重の意味がある。しかし社会学的にみるといろいろなことがそれに加わってくると思う。一つはすなわちそこはマージナル・エアリアであり、マージナル・ポイントである。異民族、異文化との接点であり、接触部分であったといえる。ここに通じる一本

の道をどっていくと、多くの国の道に通じ、その道をたどって大勢の異民族、異人種、異文化を身につけた人々や異なった階層の人々がここを通過していったことであろう。阿部謹也氏が旅人の歩く道は霊の支配するところであり、この霊をめぐる信仰や慣行は十字路に集中しているというところを書かれていたのを思い出す⁹⁾。居庸関に着く前はただ文字が刻まれていると思い、入国の際の諸注意ぐらいであろうと想像していたが、仏像をみて、もしかして道の霊に関係するか、旅人の安全を祈願する意味をもつのではないかと考えた。(それはあくまで素人の推測にすぎない) 第二に 6 体の文字の分布はかなり広範囲のものと考えられる。この言語地図と当時の政治地図を重ねると、政治的には、そのときすでに滅んでいた言語が、刻み込まれていることがわかる。つまり政治より言語の生命が長く、言語が宗教と結びつくとその命はさらに永続することをこの碑文は語っている。

第三にこの碑文が陀羅尼であることは、言語共同体が分かれていても、それが共通の、意味をもつことを示している。西夏文字やパクパ文字が読めない中国の人は漢文字を読むことによってその意味を知り、他の見知らぬ文字も同じ意味が刻まれているであろうと推察したのであろう。それを助けたのは諸仏諸尊の像であったであろう。文盲の人も文字がよめなくてもそれによって宗教的雰囲気を感じることができたであろう。居庸関では碑文が主として問題になっているが、諸仏諸尊の浮き彫りの果たした役割はきわめて重要であると思う。

ジンメルは「異邦人論」でマージナル・マンが、ものごとを普遍的・客観的にみる人間であることを指摘したが、居庸関は言語社会学、政治社会学、宗教社会学さらに芸術社会学的に多くの問題を私に投げかけてくれ、それらの研究領域

の発掘の可能性を教えてくれたようである。

こんなことを考えていると万里の長城、八達嶺に着く、北方の遊牧民族の侵入を防ぐために作られたという国境の境界塼である。八達嶺附近は山稜に沿っているが、平地の塼はそれほど高くない。道具をつかえば人間は容易にこれを越えることができる。しかし、塼を越え中に入ったとしても、食料としての大群の羊や家畜を入れることは困難である。このようにたしかに敵の侵入を防ぐという軍事目的はあったであろうが、一方ではそれは権力、支配力を誇示するためのものではなかったであろうか。T. ヴェブレンのいう誇示文化、衒示文化としての意味を考えることもできよう。山腹に李の花が咲いている、桜の花のようである。北の方に河らしきものがみえる。河の名は何というのであろうか。1月に発作を起こしたので心臓の負担を考えて登るのは途中までにする。

帰途は往路とは別である。八達嶺という名の駅の傍を通る。途中車が混み、私らが乗っていた先頭車にうしろの他の人の車が接触するというハプニングも起こる。軽い接触でムチ打ち症にならず安心する。夕方友誼商店で買物をし、宿舎で夕食をとる¹⁾。

〔注〕

- 1) 阿部謹世「中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描」平凡社、1978、14—15頁。

7.

4月29日(晴)。朝8時半出発のところ一寸した手ちがい、10時頃故宮に向けて出発する。午門から入る。チベット族の三人娘のあざやかな服装がめづらしい。同様にスカート姿の日本人の娘さん一人を中国の人々がめづらしそうにみている。まだ夏でないので北京では目立つのであろう。しかし今日の気温は初夏を思わせるほどである。思うに異文化との接触によって珍ら

しことが体験できる。逆にいうと珍らしさの発見は異文化の発見といえる。それは比較文化論的思考の出発点であろう。

明の永楽帝が15年の歳月をかけて造営したといわれる紫禁城の建物の巨大さと、敷地の宏大さに目をみはる。ここでも大きいスケールが権勢と支配力を示すバロメーターとして用いられているようだ。明・清朝時代の皇帝の政治がこの外朝で行なわれ、私生活がこの内廷で展開されたのかと思うと興味がわく。また崇禎帝のあわれな末路に想いをはせると胸がいたむ。

景山公園を眺めつつ頤和園に向かう。途中貧しき街をとおる。これと対蹠的に頤和園は西太後の権力と経済力を示した人工物であった。人工池の昆明湖に沿う廊下を歩いていると、多くの老若男女に出会う。かつては頤和園の造築に莫大な労力が必要であった。今日出会う大勢の人々の幸せそうな顔色に新中国の発展をみる。

夜、一昨日の返礼として、ささやかな答礼宴を北京烤鴨店で開き、中日友好協会と中国科学院の方々と夕食を共にする。李福德先生や凌星光先生ら10名余り来席される。われわれの北京滞在中に示された御厚情と御力添に感謝し、今後の学術交流の発展を願ってあいさつにかえた。宿舎に帰り、翌朝北京を発つため荷物をまとめる。

8.

4月30日(晴)。今日は北京を発って西安に向う日である。李福德先生が空港まで見送りにこられる。北京滞在中の御配慮に感謝し、再会を約して先生と別れる。空港内にはウルムチ行とか杭州行などの表示がある。この両者の距離は私の頭の中の地図では計算することができない。

離陸後はじめて北京の街の様子を俯瞰することができた。郊外の田園風景も美しい。11時半

すぎに西安に着く。当地の中国人民対外友好協会、秘書長の郝生信（Han）氏と何曉朗氏お二人の出迎えをうける。車の窓からみる街のたたずまいに、古都長安の面影を見つけ出そうと努力する。それははるばる海をこえて、ここまで来た阿部仲麻呂が望郷の念をいだいた土地であり、最澄、空海が学んだ都がここであるという日本人に固有の感情があるのか、また旧制中学校の一年生のとき学んだ西周から唐までの約1,000年の歴史を秘めた都を一目でもみたいと思った少年時代の憧憬のせいなのか、あるいは今はやりのシルクロードの玄関口にやってきたという安堵感、あるいは西域への果てしない夢の一部でもここで体験したいという一種の代償行為を期待するためなのかもしれない。恐らくこれらが複合し、混在して西安を特別のメガネでみているのかもしれない。

人民大廈につき旅装をとく。しばらく休憩しているとやっとここが西安なのだという現実感が湧いてくる。しかし窓外に目をやると紅旗が翻っている。メーデーの前日のためであるが、ここは社会主義国中国の西安だという実感がわく。かつて欧米を訪ねたときの印象とはちがったものを感じさせるものは何なのか、高い天井のあるホテルの食堂で昼食をとる。このホテルはロシア人が建てたもので、すべてづくりが大きい。部屋の戸も大きく天井も高い。

2時から、陝西省博物館を見学するためにホテルを出る。車が西安の城壁に近づき、平行して側を走るとき長安の昔日を想う。この歴史陳列室で多くのものをみせていただく。とても一口にはいえない。余りにも古く、しかも立派で、価値のあるものを一度に多くみたので、頭の中はまるで消化不良をおこしたようである。唐三彩の色に親しみをを感じる、外に出てよく晴れた空をみる。石室陳列室も数多くの展示物が

ある。石牛や獅の像などの間を歩き廻るだけである。碑林の屋部に入る。ここも四室あった。非常にみたいと思っていた王羲之や褚遂良、顔真卿らの碑文に直面する。感激、もう少し時間的なゆとりがあればと思う、像も、絵も、書も、陶器も、すべて美しいものばかりである。案内して下さった女性が美しい。

博物館を去り大雁塔に行く、ここも人が多い、二階に登り西方を望む。このはるか先が中東、ギリシャ、ローマなのだと考える。降りると住職のお坊さんが待っておられ、玄奘ゆかりの土地の説明をきく。ホテルに帰り夕食をすませ、「秦俑魂」(The Soul of the Terra-Cotta Army)と題する舞劇を観るため、6時すぎにホテルを出る。外国の要人の列に加わり、パトカー先導で西安の街を通りぬける、劇のストーリーはわかり易く、舞台は美しくかつ幻想的であった。

9.

5月1日(晴)。よく晴れた朝である、朝から街は活気にみちている。自転車に乗る人の姿は北京と同じように多い。子供の手を引く母親や店の前で立ちどまって買い物をする人もいる。今日は9時半にホテルを出発し、乾陵に向う。途中咸陽を通る。ここは秦の始皇帝が都としたところではなかったのか、と思うと感無量である。渭水を渡る。田園風景を眺めつつ乾陵博物館につく、柳の花が風に吹いて、さながら春の雪のように舞う。まず乾陵博物館の応接室で休息し、女性の案内人の説明をきく。そののち17基あるといわれる乾陵陪葬墓のうちの一つである永泰公主墓を訪れる。そののちもう一つの陪葬墓、章杯太子墓に詣でる。

次に唐の高宗乾陵に向かう。参道は広く、その両側の人物像や動物像、無字碑をみる。頭部のない外国の宣教師らしい立像をみると異教、

異人種への憎悪のすさまじさがひしひしと体に伝たわってくるようである。西安に戻り工芸美術店でショッピングをする。

夕方6時からホテルの宴会室で陝西省対外友好協会主催の歓迎宴に招待される。協会の副会長である魏先生が出席され、西安との姉妹都市である京都のこと、北京のこと、西安の印象などの話がでる。郝、何両氏とも歓談する。

魏先生からわれわれ団員の一人一人に西安の書家、高狹氏の唐詩を篆書で書いた本を贈られ感謝する。なかには杜甫、李白、王維、柳宋元などの詩がみえる。今夕の御招きに感謝し、今後の交流が深まりますことを願って挨拶し、8時頃部屋に戻る。夜の街をそぞろあるく。人通りも多い。季節はことなるが「長安一片月、万戸衣擣声」の詩の舞台がここなのだとも思う。

10.

5月2日(晴)。8時半、楊貴妃と、かの西安事件で有名な華清池へ向けて出発する。途中秦始皇帝の陵墓を見学し、目的地に着く。メーデーの休暇と重なったのか観光客が多い。まず広い応接間に過され、温泉場の由来や西安事件の説明をきく。事件の跡などをみて温泉に入る。郝先生の御配慮のたまものである。ここで朝風呂に入れるとは想像もしていなかったことである。風呂からあがり廻廊の片すみで休んでいると、いろいろな人に出会う。老人、若者、子供、「てんそく」の老女、人民服の男性、兵士、洋装の娘さん、一人っ子政策のため、子供を大事にし、子供を着飾っている親の心がほほえましい。私の後ろの方で大声がする、口論である。夫が押されて池に脚をつっこんだらしい。押した、押さぬの口論であろう。しかし声の主は女性である。女性上位の社会のようである。

食堂で鯉の料理が出る。昼食後、秦始皇帝兵

馬俑坑博物館を訪れる。ここでもまず応接室に通され説明をきき、その後兵馬俑を見学する。そこは大きいドームに囲われており、発掘された多数の陶俑がみえる。一体一体の顔がリアルである。馬車もある、発掘はこの一号坑の3分の1程度にすぎず、この外に2号、3号坑があるという。どうしてこのような大規模な副葬品を作ったのであろうか。明の十三陵の地下宮殿も然りであるが、現世と来世との連続観と地上と地下の世界との連続観が重なりあって意識されていたのであろう。もしそうであるならこれは社会的にみて社会的・文化的時間と空間を示す面白い一例ではないか。しかし始皇帝に限らずわれわれは、かのオットーの作品の題ではないが「天と地との間」(Zwischen Himmel und Erde)にいる不安定な存在であり、そうであればあるほど天か地に安定の場を求め、安住の所を探そうと努力するのではなからうか。始皇帝は地下にそれを求めたにすぎないともいえよう。そのスケールが余りにも大きすぎるため、この平凡な事実が誇張されることになるのであろう。4時頃西安に帰り、荷物をととのえ、5時にホテルを出発する。

郝、何両氏のあたたかい見送りをうける。両氏は実に律義で礼儀正しい方々であって、機内食まで用意して下さった。その配慮に感謝し、6時半のCA5202便で上海に向う。機内からみる西安の街が段々かすんでいく。8時すぎ無事上海につく。上海対外友好協会の人が出迎えて下さる。宿は錦江飯店にきまる。ホテルの近くの店で軽い夜食をとる。

11.

5月3日(曇りのち雨)。朝早く街のさわがしきで目がさめる。窓から見下すと階下の路上で数人が声高く話している。ホテルの食堂で朝食

をとり、8時半に出発。ホテルからすぐ近くの上海社会科学院に向う。門を入ると高屋先生の知人でこの外事所長である杜長康氏の出迎えをうける。二階の応接間に通され、杜氏の通訳で会議を始める。先方は仏教大学という名前から判断されたのか、仏教関係、宗教学の研究者を集められた様子である。そのお名前と専攻分野をみると、宗教学専攻の高振農先生、伝教文化を研究されている王方興先生、南北朝の宗教史の葉露華先生、チベット仏教、原始宗教専攻の常露成先生、先生は日本の新興宗教にも関心をもたれている。このように宗教学関係の4人の先生方の外に、社会学研究所の方で老人問題の研究者である黄彩英先生、都市社会学の若い研究者である王頤先生、この方は日本語が堪能である。

今日は各自の自己紹介のところで専門分野と研究の一端をのべるということにして、まず私から、科学、技術社会学、産業社会論について、団員の諸先生方も各自紹介報告された。そのあとに藤山、加藤、荒木助教授らを中心に次のような活発な質疑応答がなされた。

その中の重なものとして解放前と後とでは宗教にたいしてどのような変化が起ったか、という質問にたいして次のような返事がかえってきた。解放前は宗教が社会主義の建設を阻害するものであると批判されていたが、今日ではプラス面が評価されつつあること、宗教研究所の大きい課題は、社会主義時代における宗教にかんする研究であること、仏教文化は中国文化の重要な遺産であるゆえに研究すべきであること、少数民族と宗教にかんしては、少数民族は信仰が許されていることなどを知ることができた。

ついで高屋教授から上海社会科学院の組織について質問があり、これに対して杜氏から次のような説明がなされた。ここでは経済研究所、貿易、哲学(西洋哲学、東洋哲学)歴史、文学、

宗教学など13の研究所があり、40人の所員があり、社会学研究所は人口、家庭、労働、社会事業(福祉)、都市、海外の社会学、理論、学史の研究をおこなっているとのことであった。宗教研究所では仏教、キリスト教、道教、社会主義国の宗教などの研究をおこなっており、約20人の所員によって構成されているということであった。

おわりに仏教大学の学部、大学院、研究所などについての質問があり、これに対して浜岡教授から説明がなされた。そして文献の交換をはじめ人間の交流を含めて、今後の学術の交流がさかんになることを双方とも希望して、11時に会議を終え、玄関で記念写真を撮り別れた。

昨日上海についたとき、上海の自治組織である居民委員会を見学したい旨、申し出ていたが、対外友好協会上海市公室の格別の御配慮をいただきそれが実現した。昼食後、静安区愚谷邨にある委員会を訪ねることができた。この居民委員会は1975年に設立され、170世帯、2,100人の住民から構成されている。日本風の団地の委員会で、男女合わせて約6名の委員と一階の部屋でお会いし、とくに谷口助教授から委員会の沿革、党との関係、現在の構成や財政活動について質問があり、補足質問が藤山、荒木助教授から行われた。

居民委員会の方々と別れて、玉仏禅寺に詣でる。ビルマから伝わったという玉で作られた横臥仏と坐仏の二体を拝み、外に出て真山法師とお会いして話す。雨が降り出し、急いでバスにのる。南京路に向い第十百貨店に入る。店内は工事中である、遮断幕もなく買物客の間を手押し車がとあっていく。他の店にも入りショッピングをする。売場をみると、商品によっては種類が少ないところもあり、応対に出る店員のサービスはよいといえない場合もある。かつて友

人と一緒に外国へ行ったとき、彼がその国の経済事情を直接知る方法として商店で買物をし、商品の量と質、値段をみるとわかると語っていたが、もう一つの指標としてサービスを考慮することが必要だと思う。とくに産業化が高度になればなるほど、サービスの意味が重視されるのではなからうか。

6時半から対外友好協会上海市分会付会長の馬飛海先生の招きによる歓迎会に出席する。場所は上海大廈である。食事の準備中も別室で話しがはずみ、食事中の談話も楽しい。中国での印象、上海市が今日かかえている問題、将来計画、日本を訪問したときの印象などと話題は尽きない。御招待に感謝し、今後の友好を願って、8時半ホテルに帰る。10時半頃からこの9月間通訳として大変お世話になった周鑑氏への御礼としてさきやかな会を催す。ビールで乾杯し、西安で求めてきたお酒をのみ、旅の印象や失敗談などを語り、御苦労をねぎらう。話は尽きないが明日の朝は早いので12時頃別れる。

12.

5月4日(晴)朝5時半に起床、考えてみればこの9日間は早起きであった。意識していないが、矢張り精神的に緊張状態におかれていたのであろう。荷物をまとめ、6時にトランク等を室外に持出す。6時半錦江飯店を出発、早朝にもかかわらず上海社会科学院の高先生が空港まで同道される。先生は昨日も買物まで御一緒して下さい、御配慮に感謝する。

バスの窓からみると太極拳をする多数の老人、中年の男女がみえる。自転車での通勤風景

もこれで当分みられないであろう。7時すぎに空港につく。CA915便の出発まで暫く時間があるので食堂で朝食をとる。通訳の周氏の御苦労と高先生の見送りに感謝し、団員8名はお二人と固い握手をして別れる。帰途ゆれがひどい。しかし11時40分無事大阪空港に着く。仁科課長と高橋助手の出迎えをうける。大学の車にのり、車中、仁科さんに今回の旅行の概要をお話する。車で各自の家まで送って下さる。

この訪中記をとじるにあたって、さいごに一言、印象をのべると、今回の旅行は中国の一部、あるいは小さい点にふれたにすぎない。あるいは、ふれたと思ってふれていない部分が多く、見たと云っても正しく見ていない部分が多々あると思う。しかし初めて見知らぬ国へ行き、そこで自分なりに見聞し、経験したことは、それがたんなる個人的な印象であり、解釈であっても、今後の中国観、さらに社会観、世界観の形成に大きい意味をもつと考える。逆にいえば今回の中国旅行によって、今迄の自分がいかに中国について知らなかったかを知り得たことが一番の収穫であったといえよう。ソクラテスの「無知の知」(oida hoti ouk oida)の自覚から次の新しい認識がはじまるのである。

この報告をとじるにあたり、お世話になった中日友好協会、西安、上海の対外友好協会の方々、および中国社会科学院、上海社会科学院、北京大学社会学系の先生方、通訳の周さんらのあたたかい御配慮と御力添にたいし心からお礼をのべ、また仏教大学の御支援に感謝する次第である。

(1986年1月7日)